講演 2

５０歳代からの口腔の健康をどう守るか？

－データの見える化と口腔機能から考えるこれからの予防歯科－

長縄 敬弘先生

医療法人PBC 東山デンタルクリニック院長

５０歳代以降の患者さんでは、う蝕や歯周病の治療とメンテナンスが順調に進み口腔内が安定する一方で、「今は困っていない」という理由から定期来院の意義が見えにくくなる場面が少なくありません。これまでの予防歯科は主に疾患の再発防止を目的としてきましたが、患者さんの人生後半を支えるためには、さらに一歩進んだ関わりが求められていると感じています。本講演では、６０歳代で当院に通院を開始し、１０年以上にわたり歯科衛生士が継続的にメンテナンスを担当してきた７０歳代女性患者さんとの関わりを通して、口腔機能低下症の視点がもたらす新しい可能性を紹介します。歯周病が安定したこの患者さんに対し、口腔機能の評価を「これからの健康を守るための取り組み」として提案したところ、「検査が楽しかった」「新しい健康維持の方法を知れて嬉しい」という前向きな反応が得られ、定期管理に新たな意味づけが生まれました。

一方で、認知症高齢者の症例では、歯科衛生士と家族が連携することで炎症のコントロールは良好に達成できたものの、口腔機能低下は多職種による訓練介入を行っても進行を防ぐことができませんでした。この経験は、口腔機能は低下してから回復させることが極めて難しく、元気な時期から予防的に関わることの重要性を強く示しています。つまり口腔機能低下症は「高齢者になってからの課題」ではなく、５０歳代から継続的に見守り支えていくべきテーマであると考えます。

長期的な信頼関係の中で患者さんに寄り添い、小さな変化に気づき、前向きな取り組みへとつなげていくことは、歯科衛生士ならではの専門性であり、大きなやりがいです。本講演では、日常臨床の具体例をもとに、口腔機能低下症を活用した継続来院へのアプローチと、患者さんの人生に長く関わる歯科衛生士の役割について考察します。